

日本人英語学習者に見られる音連結の欠如

Absence of Sound Linking among Japanese Learners of English

福島 彰利

Akitoshi Fukushima

Abstract : This paper is concerned with one of the inefficiencies found in pronunciation of Japanese learners of English: that is, sound linking that takes place at word boundaries as a result of natural flow of an utterance. This inefficiency is even found in students who are involved in a teacher-training course. Four students who enrolled in my "Studies on English Education" volunteered to read out short English sentences for an acoustic analysis. It turned out that they focused on reading word by word, failing to pay attention to linking the neighboring words where necessary. Also, they are not paying attention to the distinctions between strong and weak forms of function words, which would cause their English speech full of strong syllables. The result suggests that the students were taught neither the linking process nor the distinction between strong and weak forms found in natural speech during their very early stages of English learning.

Key Words : English pronunciation, linking, isolate word forms, weak forms.

要旨 : 本稿は日本人英語学習者の発音に見られる欠点の1つ、すなわち、自然な発話に生じる単語間の音連結の欠如について論じる。この発音上の欠点は、教職課程の学生にも散見される。筆者の担当する「英語科教育研究」を受講する学生のうちから4名が朗読した英語の文章を音響的に分析したところ、以下のことが判明した。彼等は音連結を意識することなく、むしろ単語1つ1つを固まりとして発音する傾向にある。さらに、機能語の強形と弱形を区別せず、強音節が過剰な発話になる傾向にある。この結果は、英語学習の初期段階で、彼等が音連結や強形と弱形の区別について十分に教えられていないことを示唆している。

キーワード : 英語の発音、音連結、独立語、弱形

1 はじめに

本稿の目的は、中学・高校の英語免許取得希望学生の英語朗読に見られる共通の間違いや不十分な点を指摘しつつ、教室での発音指導においてぜひとも取り上げるべき事項を提案することにある。

JanglishやJaplishといった語が存在することからも明らかなおり、日本人の英語の発音には「英

語らしくない」特徴が多々あることは周知のことである。筆者は「英語科教育研究」（2年次配当／半期科目）を担当し、発音教育について講義をし、演習をさせているが、こうした「英語らしくない」発音は、残念ながら、英語免許取得希望学生の中にも見られる。

「中学校学習指導要領解説外国語編」（平成20年

7月) (以下、指導要領と略す) は、英語における発音の目標の一つを次のように述べている。

強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること。

ここに述べられた「区切り」には、以下に引用するとおり、語境界における音の脱落、連結、同化現象のすべてが含まれている。

脱落：I don't^ know.

連結：Take^ it^ easy.

同化：Why don't^ you join us?

特に本稿においては、課程学生らの発音に連結(Linking) がどの程度具現されているかに注目してみたい。

2 発音の実態—聴覚的観察

2013年度「英語科教育研究」の第1回目の講義の前に、授業登録予定者の中から希望者を募り、4人の学生が以下の4文を朗読した。これをいったんQuickTime (Version 7.6.6) を通してiMac (OS-X 10.8.5) に取り込み、それらを聴覚的に分析した。

- (1) I'm glad to know ¹an expert like you.
- (2) I'll tell him to ²turn out before ³ten o'clock.
- (3) ^{4,5}In an instant they began to make ⁶fun of me.
- (4) ⁷Because of the strike they couldn't ⁸come along.

それぞれ上付き数字と下線で示したとおり、4文合わせて8カ所において、自然な音現象として連結が生じるはずである。表1は、4人の学生の朗読に関わる連結の有無を示している。S1~4は朗読者を示し、横軸の数字は、連結箇所を示している。✓印は、朗読者が当該語境界で連結を行ったことを表している。

	1	2	3	4	5	6	7	8
S1		✓	✓	✓		✓	✓	✓
S2								✓
S3		✓	✓	✓			✓	✓
S4							✓	✓

表1：連結の有無

4人の学生の朗読を比較すると、S1とS3は8つのターゲットのうち半数以上で連結を行っているのに対し、S2とS4は明らかに連結がうまくいっていないことが分かる。学生間でばらつきがあるものの、少なくとも語境界での連結は十分に習得できているとはいいがたい。

この結果は、第2言語学習時に生じる「母語の干渉」という観点から考えるならとても興味深い。朗読をした4人の学生は英語の習得が完結したわけではなく、今も習得段階にある。その意味で、彼らの英語の発音には第1言語である日本語の干渉が生じていても不思議ではない。よく知られているとおり、日本語の開音節性という音節構造は英語の発音習得に干渉する。例えば、英語のdeskは1音節語だが、日本人英語学習者は子音が連結した部分に母音を挿入し、de-su-kuのように3音節でこの語を発音するわけである。この開音節に慣れていないことは、英語の連結を習得する際にむしろ好影響をもたらすことはないのだろうか。つまり、英語における語境界での連結は、語末部分の子音を後続語に取り込み「子音-母音」という開音節連鎖を作ることに他ならないのだから、日本人にとってはむしろ容易なことだといえる。にもかかわらず、連結の習得が完全でないのは何故なのか。

さらにもう1点、注目すべきことがある。それは、ターゲット1と5の連結を達成できた学生は一人もいないことである。実はこの2つのターゲットには共通点がある。1: an expertも5: an instantも名詞句であると同時に、名詞自体は強勢音節で始まっている。つまり、連結が生じる箇所、弱音節-強音節の連鎖になっているのである。このような音環境のもとで、朗読者に何らかのメカニズムが作用しているのだろうか。

上記の2点について、次のセクションでは朗読音声のスペクトログラムを吟味し、その答えを探してみたい。

3 発音の実態—音響特性による観察

このセクションでは、4人がそろって連結を達

成できなかった文に焦点を当て、その音響特性を明らかにする。以下の図は、音声分析プログラム WASP (Version 1.53) を用いて描いたスペクトログラムである。

まず例文 1) 中の an expert の部分について、図

1 は筆者の朗読を (これ以降 S 0 と略す)、図 2 と 3 はそれぞれ S 1 と S 3 の朗読をスペクトログラムに表したものである。例文 3) 中の In an instant については、図 4、5、6 のそれぞれが、S 0、S 2、S 4 の朗読に対応している。

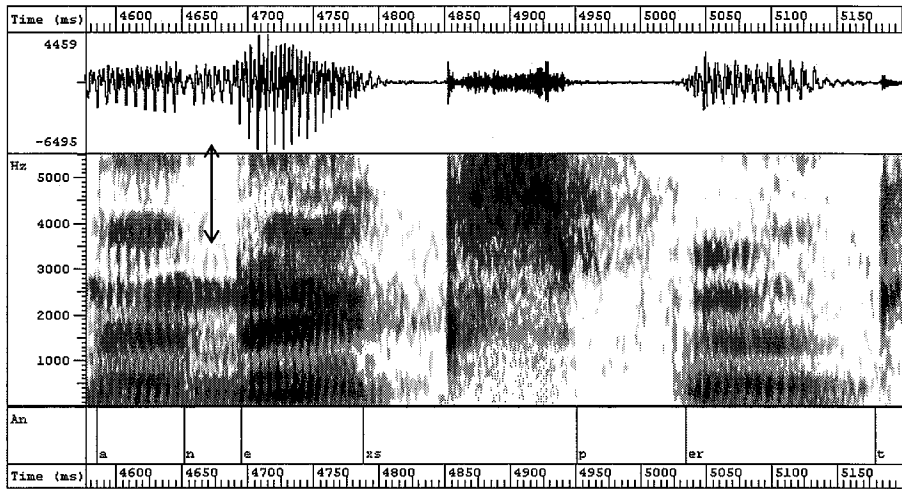


図 1 : S 0 による an expert の朗読

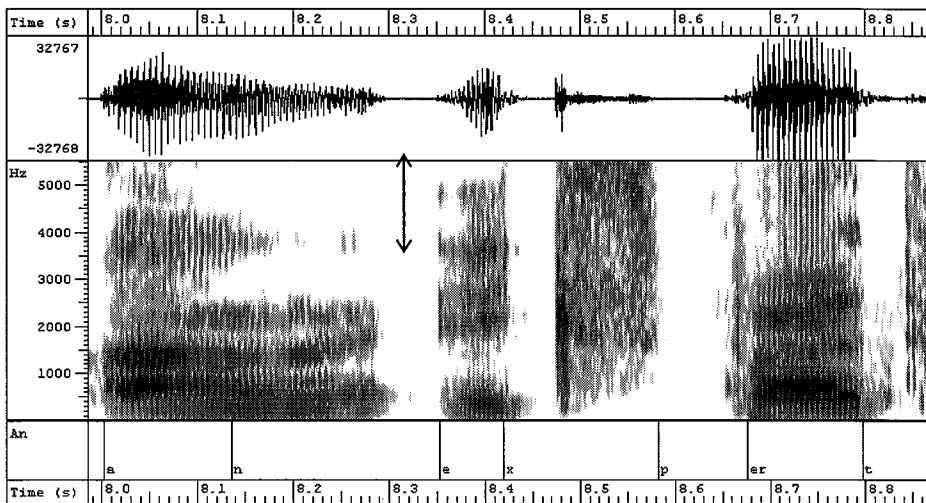


図 2 : S 1 による an expert の朗読

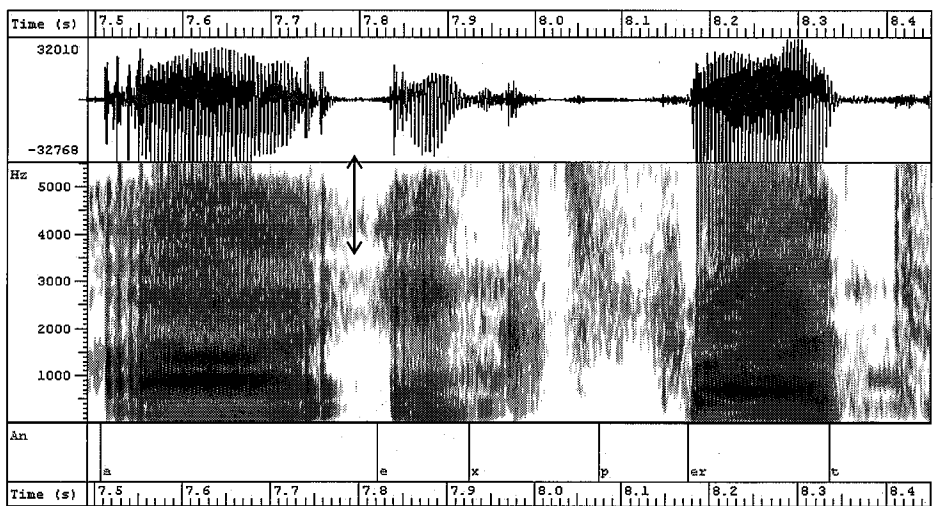


図 3 : S 3 による an expert の朗読

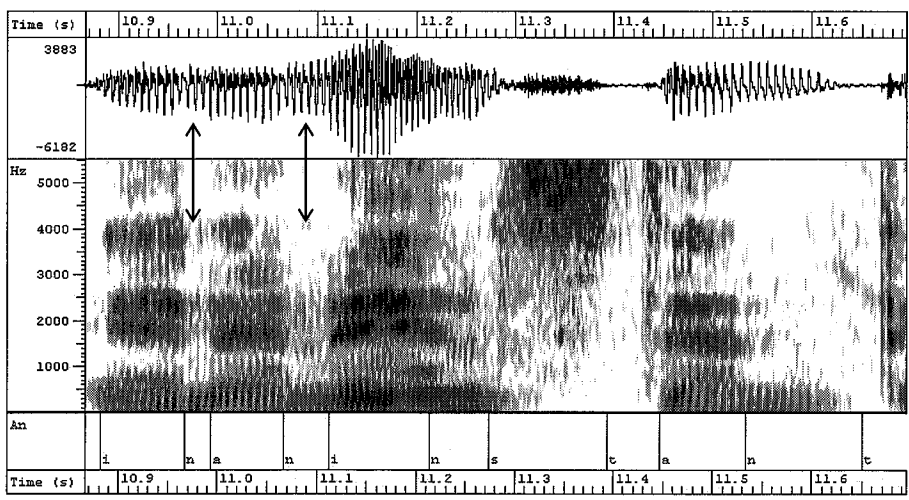


図 4 : S 0 による in an instant の朗読

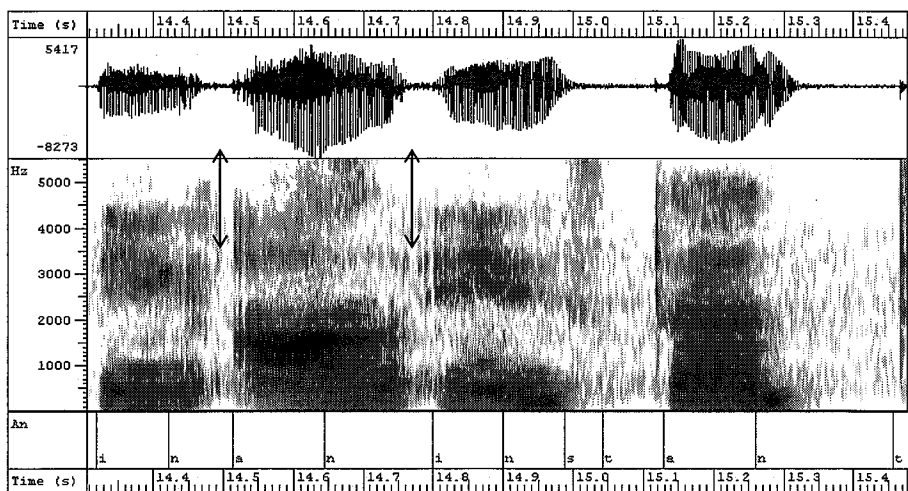


図5：S 2による in an instant の朗読

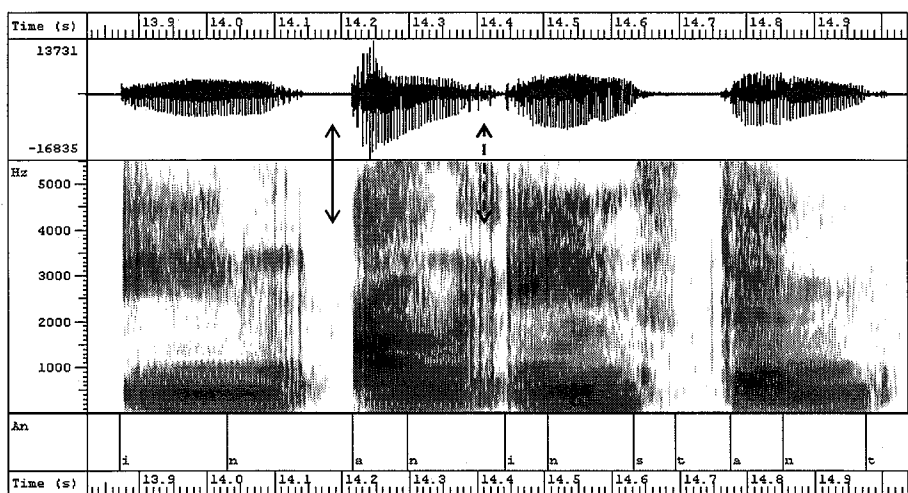


図6：S 4による in an instant の朗読

まず注目すべきことは、それぞれのフレーズ中の強勢音節がもたらす波形の振幅である。an expert (これ以降Exp句と略す)は3音節連鎖であり、その第2番目の音節に強勢母音を持っている。In an instantの場合(これ以降Ins句と略す)、4音節連鎖で第3音節に強勢を持っている。強勢母音は無強勢母音に比べるとインテンシティーは高くなり、それは波形の振幅に反映されることになる。図1と4において、確かに、強勢音節のところでも

振幅が大きくなっている。ところが、図2、3、5、6におけるそれぞれの強勢母音の振幅と無強勢母音の振幅には大きな差が見いだせない。むしろ、無強勢音節であるにも関わらず強い振幅を持った朗読が散見される。その結果、波形を見る限り、どの音節に強勢がおかれているのか判然としない。換言すると、朗読者は一つ一つの音節間に差を設けず、それぞれを均等につなげようとしているかのようにも見える。

さらにもう1点、注目すべきことは、図1～6それぞれに記した矢印の部分である。これらの箇所はいずれも語境界に相当するのだが、図1と4ではここに空白がなく、まさしく隣り合った音節間で連結が生じている。一方、図2、3、5、6においては、図6の破線矢印の部分を除いて、明らかに空白が生じている。これらの空白は言うまでもなくほぼ無音状態であり、連結が生じていないことを示している。つまり、S1～4の朗読者は、隣り合った音節を連結させようとはしておらず、むしろそれぞれの音節を独立させることを意識していると言わざるを得ない。少なくとも、日本語の特徴の一つである開音節性は、英語を朗読する際に連結を促すような作用を全く持っていないのである。

図6の破線矢印の部分については、完全な空白とはなっていないため連結が行なわれているように見えるが、実はそうとも言い切れない。このことについては、次のセクションで議論することとする。

4 考察と提案

S1～4の朗読の音響特性を吟味し、明らかになったことは、音連結が生じるべき箇所に連結の痕跡が見出せないことである。連結が生じていないということは、単語一つ一つを独立させて発音することが強く意識されていると思われる。この原因はどこにあるのだろうか。

そもそも、英語だけに限られたことではなく、外国語の発音に係る学習は単語をベースにして行なわれるのが一般的である (Cruttenden 2008)。確かに、英語の授業では、新出単語の練習にはフラッシュカード等を用いながら行なうことが普通である。生徒は単語という固まりを意識せざるを得ない。こうした意識が特に顕在化するのには、Exp句とIns句のように名詞が強勢母音で始まる場合で、4人の朗読者がそろってこれらの2つの句において連結ができていない理由だと考えられる。さらに、残念ながら、上田・大塚 (2010) にも指摘されているとおり、中学生用の英語検定教科書にお

いて音連結に関する記述や説明は極めて少ない。多くの教科書では、単語間の連結を「ひとつのまとまりとして」、「1つの単語のように」等、簡単な説明にとどめている。英語学習の初期において、連結を意識させる機会が質、量ともに不足しているのである。こうした状況が生じていることは、決して看過できることではない。Cruttenden (2008) は、英語の自然な発音に含まれる要素の1つとして音連結の存在を指摘している。彼によると、連結のない発音は「異常である (abnormal)」とさえ述べている。つまり、現状では、指導要領が求めている「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること」という目標は達成のしようがない。自然な英語の発音には不可欠なもの1つである連結について充分知らされず、練習する機会に欠けている状況下で英語を学習してきたのだから、今回朗読をした学生たちが連結をうまく出来ないのは仕方のないことなのかもしれない。

もう一点、S1～4の朗読には、単語1つ1つの発音の強さが均等になる傾向があることを指摘した。このことは、上にも述べたとおり、発音練習が独立語をもとに行なわれていることに起因しているとも言えようが、そのこと以上に、英語の発音型には強形と弱形の2つの型式を持つ単語があることが周知されていないことに問題がある。本論文で取り上げた (1)～(4) において連結を引き起こす可能性を持つ単語の内in、an、of等は機能語であって、発話においてはほとんど弱形となる。弱形は、強勢・アクセントを持たないわけだから、弱く、短く発音されねばならない。しかし、こうした発音の実態が検定教科書ではほとんど扱われていない。例えば、上記担当科目で使用したNew Crown English Series 1～3 (2011検定) は、機能語の発音表記として強形のみが掲載され、弱形は割愛されている。だとすると、生徒にとってofは常に/ 'ɒv /であって/ əv /とはならず、canは/ 'kæn /であって/ kən /とはならないのである。強形、すなわち強勢・アクセントを持つ型式のみが単語練習でインプットされ、その型

式がアウトプットされたのが、S 1～4の朗読だと考えるのに無理はないように思われる。¹

連結が起こるべき箇所空白が生じているのがほとんどの朗読者の発話だったわけだが、一例の

み、空白の有無が明確でないものがあった。図6に示された破線矢印の部分である。以下の図7は、この部分を拡大したスペクトログラムである。

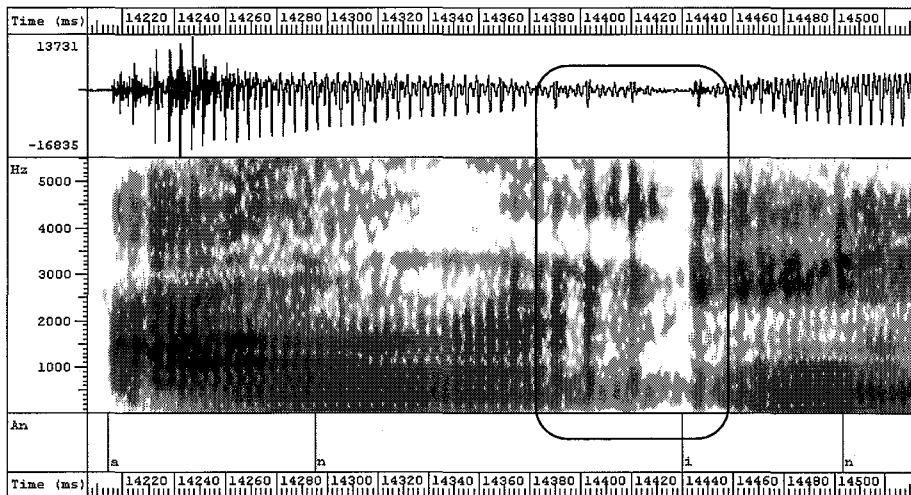


図7：S 4による an instant の朗読

まず、この部分の細条の幅が広がっていることに注目したい。これは、声帯の開閉速度が減少しつつあることを意味している。このような声帯の仕草が起こり、ピッチが下がるときの音をきしみ声 (creaky voice) と言うのだが、これは1つの特性として発話の末端、特に下降調の末端に生じることが分かっている (Crystal 1969)。すなわちS 4は、anの部分をもつと捉え、その末端部分を音声的にきしみ声を用いて示していることになる。さらに、隙間が広い細条の最後ものは黒色が濃く出ており、この部分は強い声門閉鎖が生じていると判断できる。声門閉鎖の機能の1つとして、母音の開始期を強調するハードアタック (hard attack) と呼ばれる機能があるが (Wells 2008³)、S 4はinstantが強勢母音で始まる音の固まりであることを強く意識し、声門閉鎖すなわちハードアタックを駆使したと考えられる。よって、S 4は空白によらない手段を用い、他の朗読者と同様、anとinstantの間に境界があるとの認識のもとに朗読を行なっているのである。

以上、指導要領の求める「基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音する」ことに係ることとして、音連結にまつわる状況について俯瞰した。少なくとも英語学習の初期段階にあつては、独立語をもとにして発音の習得を促すことを中心に据えると弊害がある。発音教育はもっと連続音声の実態に即したものでなければならない。教える側の人間として、とりわけ英語教員を目指す教職課程の学生は、自然な英語の発音を自ら身に付け、学校現場においてそれを無理なく発揮できるようになってほしい。田邊 (1988) によると、中学生は教員のモデルリーディングを、高い確率でそのまま模倣することが報告されている。教員が発する不自然な英語の発音がインプットされ、そのまま生徒のアウトプットになってしまうことはぜひとも避けねばならない。

注

1 強形と弱形の区別がうまくいっていないことは、音連結のみに関わる問題ではなく、リズムの問題でもある。日本語の開音節性は英語を読む際に好影響を持たないようだが、音節拍リズム性は本稿の朗読者の英語に影響が出ているらしく思われる。このことについては、機会をあらためて議論したい。

参考文献

- Cruttenden, A. (2008) *Gimson's Pronunciation of English*, Seventh Edition. London: Hodder Education.
- Crystal, D. (1969) *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説外国語編』
- 田邊祐司 (1988) 「中学校英語科における発音指導への一考察—教師の影響力—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 18. (第13回全国英語教育学会自由研究発表)143-147.
- 上田洋子・大塚朝美 (2010) 「発音と音声の仕組みに焦点をあてた中学校英語教科書分析 ～インプットの基礎を考察する～」『大阪女学院大学紀要』7号, 15-32.
- Wells, J.C. (2008³) *Longman Pronunciation Dictionary*. Harlow: Pearson Education Limited.
- New Crown English Series* 1～3 (2011検定) 東京：三省堂